

三重宙返りの記

海野十三

青空文庫

僕は、このところ二三ヶ月、からだの工合がよくない。それでこの日、文壇ぶんだん航空会にも、残念ながら特殊飛行は断念して、辞退を申出ておいたのであつた。殊ことに、その前々日は終しゅうじつ日家にいて床についていたし、その前日は、炬燵こたつの中で終日、日米関係の本を読んでいた始末であつた。だから当日は、ふらふらするからだを豊岡まで搬はこんだようなわけで、特殊飛行をする意志は毛もうと頭うなかつたのであつた。

「海野さん。さあ、支度したくをなさい」

「僕は、今日は、乗りませんよ」

「そんなことはない。あんたが乗らないということはない。そん

なことをいうと、皆、乗らないといい出すよ。さあ、支度を」

「僕は、からだが悪いので……」

「どこが、どうわるい」

「心臓やその他……機上で人事不省じんじふせいになるなんて、醜態しゅうたいです

からねえ」

「なあに、心臓なんか、大丈夫だ。こんな機会は二度とないから、乗りなさい」

これは西原少佐殿と僕との押問答だ。これを傍で聞いている皆々は、愉快そうににやにや笑っているが、僕は笑い事ではない。

こんなことを数回くりかえした。

西原少佐殿は、熱心すずにくりかえし薦め、そして僕を元気づけて

くれる。ここに於て、僕は秒前までの乗らないという決心をさら
りひるがえと翻し、

「はい、乗りましょう」

といて、オーバーの釦ボタンに手をかけた。これが最初の宙返りで
あつた。意志というか覚悟というか、その宙返りであつた。決
意してしまえば、元々好きなことなんだから、とたんに、わがか
らだはもうふわつと空に浮んだようだつた……。

機は約千五百メートルにとびあがつた。

はるかな地上には煙霧が匂はい、夕陽はどんよりと光を失い、貯
水池と川とだけが、硝子ガラスのように光っていた。と、突如、からだ
がぐーつと下に圧えられた。機は奇妙な呻うなりをたてはじめた。い

よいよ始まった、宙返りが……。

宙返りをしていることは、はつきり分っているくせに、「自分は今、本当に宙返りをやっているのかしら、夢を見ているのではないか」という疑念がしきりと湧いた。

——そのとき、虚空こくうと大地とが、まるで扁へん平ぺいな壁のように感じられた。空は湖のようだ。ぐうーと水平線があがって、上から巨大なる島が下りてきた——と思つたら、それは島ではなく、わが地球であつたのだ。芝居の背景が、ぐるぐるまわっているような感じでもあつた。僕は、ひたすら錯覚さくかくの世界を追つていたのだ。

はげしい横転の始まった瞬間には、僕の身体は、機外において

けぼりにされたように感じた。水平線が、きらきらと、交錯こうさくした水車の車軸のようにみえる。奇妙なことだ。

一等気持のわるかったのは、上昇反転であつた。機はぐんぐん垂直に上昇していつて、その頂上で、エンジンはたと停り、そして失速する。からだが、空中にびたりと停つた。まるで空中に腰掛があつて、その上に、ふわりと胡坐あぐらをかけたようなふしぎな気持だ。そこまではいいが、とたんに、下腹を座席へ固くしめつけている筈はずの生命の帯おび皮かわが俄にわかゆるみ、からだか逆さになつて、その緩んだ帯皮から、だらりとぶらさがる。機を放れて、単身たんしん墜落の感じた。はつと目を前方に向け、そこにあるべきはずの地平線を探るんだが、地平線は無く、顔のまん前にあつたのは、何

ともいえない気味の悪い青黒い壁のような大地であった。いつの間にか機首を下にした機は、次の瞬間、どどどと奈落ならくに顛落てんらくする……。

特殊飛行中、僕は特に頭を下げて、自分のからだに、今如何なる苦痛が懸っているかを特に注意してみた。急上昇のときだと思うが、胸と太ももが、目に見えない魔物のために、今にも押おし潰つぶされそうに痛むのを発見して、ああこれこそ我慢づよいわが空の勇士が、絶えず相手に闘っているところの見えざる敵。慣性かんせいだなど悟った。

機が地上に下りると、僕は急に胸先がわるくなつて、むかむかしてきた。生唾なまつばが、だらだらと出てきた。全身には、びっしょ

り汗をかいていた。だが僕は、大声で叫びたいほど愉快であつた。僕は、機上から下りて、校長閣下を始め御歴々おれきれきに対し、初めて拳手の礼をもつて挨拶あいさつをした。鼻汁がたれているのはわかつていたが、これを拭ぬぐうすべをしらないほど平常の身嗜みだしなみに無関心だつた。

西原少佐殿は、さつきとは打つてかわり、それからいくどもくりかえし、

「海野さん、まだ胸がわるいか。まだ、なおらんか」
と、電車の中までも、いたわつてくれた。

はつきり書くと、その夜八時半ごろになつて、この胸のわるさは、やつと癒なおつた。と同時に、ここ数ヶ月の気分の悪さが、一ペ

んに吹きとんでしまった感じがした。決行するとは全然予期しなかった特殊飛行は、僕の病気までを宙返らせた。最悪の状況下にある自分のからだを駆って、よくも宙返りに耐えたということ、私事ながら、実に大きな収穫であった。病気のときは、進んで特殊飛行を志願することにした。但しそう思ったのは、まるで生れかわったように元気になった翌日のことではあったが……。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 別巻1 評論・ノンフィクション」三一
書房

1991（平成3）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「航空朝日」朝日新聞東京本社

1940（昭和15）年4月号

入力：田中哲郎

校正：土屋隆

2005年6月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三重宙返りの記

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>